

双月刊行有料宅配誌／編集兼発行人・中村公省

# 蒼蒼

第88号

2001年2月10日 発行  
宅配料2年12号1000円  
(小額郵便切手可)

株式会社蒼蒼社／東京都町田市森野2-26-16

## 痰、唾、手鼻

陶坊資

【解題】以下は『日中生活民俗体験』（蒼蒼社、二〇〇一年秋刊行予定）のための試稿です。このエッセーに対して、忌憚のないご意見をお寄せいただき、よりよいものに磨いていきたいと思えます。感想をお待ちします。

著者の陶坊資氏は、一九二七年、江蘇省無錫出身。父は医学者で文学者の陶晶孫、母

は郭沫若夫人の実妹の日本人。中国籍、中国育ちながら、教育の多くは日本で受け、二高、京大に学ぶ。京大卒業後、日本の電力会社で働き、五八年に周恩来の呼びかけに応じて中国に帰国して電力技師として祖国の建設に尽力。しかし、文化大革命のために命からがら日本に立ち返り、日本に帰化し、現在に至っています。

本書の題材は、トイレ、風呂、食生活、病院、健康、旅館など日中の生活風俗全般に及んでおり、日中両国の生活風俗の中で生きたった特異な体験を凝縮していると思われまます。御予約も歓迎します。

### 「1」

私は子供の頃、神奈川県湘南の浜辺に住んでいて、小学校の同級生や、家の近くの遊び仲間、漁師の子供が沢山いた。彼らは、肩あげ、腰あげを残した大柄の紺の着物を着ていて、都会から来て洋服を着せられていた私にとっては、ある意味で羨ましくて仕方なかった。小さい子供は猿股も履かないものが多かったので、用便は実に簡

単で、着物をバツと脱げば丸裸で、そのまますぐ海に飛び込める。鼻をかむのにも、ハンカチや鼻紙を取り出す必要もなく（そんな物など持っているはずもなかったが）、二の腕でグイッと拭けば片付く。着物の袖は、積もる鼻汁が乾いて、コチコチで、ピカピカに光っていた。私もちよっと真似て洋服の袖で拭いたことがあるが、確かに手軽で、気持ちがいい。夢中で遊んだり騒いだりしている時には、もってこいの方法である。しかし、袖を汚せば、家に帰って母に叱られるから、そつ度々実行するわけにはいかなかった。

高校（旧制）は、戦況が日本に不利に傾いていた時期である。人手を兵隊に取られて労働力不足に陥った農村に、度々支援に行かされ、農家に泊まり込んで、田植え、草取り、刈り入れ等をやらされたが、この時に田圃や畝で大いに手鼻をかんだ。我々は日本手拭を一本首に巻いているだけで、手も顔も泥だらけであるから、手鼻は実に便利であった。

社会に出てからは、登山や山岳地帯の踏

査測量に出掛けた時などに、手鼻をかんだことがあった。しかし、これは決して堂々としたわけではなく、なるべく人のいない時を狙ってやった積もりである。

## 〔2〕

中国では昔から、堂々と痰を吐き散らし、手鼻をかむ。

私が中国に移住したばかりの頃（一九五八年）北京市内では、小学生が街頭に出て、メガホン片手に、「不要随地吐痰！」（やたらに痰を吐き散らすな）と、声高く呼びかけていた。小学生を、市内のあらゆる地点に配して宣伝するというのは、逆に考えれば、如何に多くの人々が街頭に痰、唾を吐き散らし、手鼻をかんでいるか、そしてこの悪習が如何に深刻であるかを示していた。その頃、中国のオフィスでは、部屋、廊下や庭に限らず、至る所に痰壺が置いてあった。痰壺にも様々の形状、寸法、色彩があったが、どの壺にも長い柄のついた木の丸い蓋が乗っていた。

私のオフィスの部屋の片隅にも痰壺が

あった。一心に製図板に向かっていた学校出立での可愛い女性技術者が、一寸鼻をぐずぐずさせたかと思うと、ヒョイと立ち上がり、部屋の隅に向かう。長い木の柄をつかんで蓋をとって、痰壺に向かつて、チーン。実に景気の良い音を立てて手鼻をかむ。その技術は大したものだ。ちゃんと飛んで行って、ピタリと小さい痰壺に命中する。彼女の顔にも指先にも、鼻汁なんか全然付いていない。

他の男共も皆見事な技術を披露してくれる。私は、誰もいない時に、一寸真似してみたが、なかなか上手く痰壺に入らず、その周囲を汚してしまう。しゃがんで痰壺に顔を近づけてやって、やっと目的を果たすことができる。しかし、誰のものか分からない他人の青痰や黄色い鼻汁が溢れている痰壺に、自分の鼻先を近付けるのは、決して気持ちいいものではない。以後、私は、少なくとも室内では、手鼻をかむことをやめてしまった。

## 〔3〕

中国に渡って仕事を始めた頃、よく共産党の書記から「何か意見は無いか？」と尋ねられた。そこで、ある時、「無差別に痰を吐き、手鼻をかむ習慣はよくない」と言ったら、たちまち、長々と説教される羽目になった。

「中国は、長年外国の侵略を受けて貧乏になり、一般大衆は鼻紙を買うお金すらなくなっていました。そこで止むを得ず手鼻をかみ、これが習慣になった」「これこそ帝国主義の犯した罪悪の一つである」「この習慣を直すには、相当時間がかかる。忍耐強く生産に励め。物質が豊かになれば、悪習は自然と消滅する」「決して中国を軽蔑したり、中国の未来に対して悲観したりしてはいけない」

しかし、痰、唾を平気で吐くのは、何も虐げられた一般民衆だけの習慣ではなさそうだ。清国の巨頭・李鴻章が日清講和条約のために日本を訪問した時（一八九五年、明治二八年）、国賓として迎えた日本側が用意した分厚い絹の絨毯の上に、カーッと青痰を吐いたのは、余りにも有名な話である。

私が北京に落ち着いてから間もなくの頃であるが、ある大会があり、皆が大きな講堂に集まり、高官（大臣クラス）の報告を聞いた際のことである。壇上の高官は、しゃべりながら、だんだん熱が上がってきて、突然、横を向いて、カーッと痰を吐いた。その演壇には、痰壺が置いてなかった。

びっくりした司会者が、慌てて両手で痰壺を捧げて走り寄り、演台の足下に置く。高官は続けてしゃべるが、また興奮してきて、痰壺に向かってチーンと手鼻をかむ。見事に痰壺に入ったのはよいが、手つきが少々狂ったらしく、鼻汁が顔と手に残った。近くにいた女性（おそらく夫人であろう）がとんで行き、ハンカチを差し出す（さすが女性は常時ハンカチを携帯している）。高官はそれを無造作に受取り、顔と手を拭き、すぐ彼女に返す。何事もなかったかのように、大声の講演は続いた。

人民大会堂（国会議事堂に相当）が竣工した時（一九五九年）、世界でも一、二を争う立派な会議の殿堂であるとして、役所、企業及び学校等の職員や学生を動員して見学

をさせたことがある。その時の注意事項の一つに痰唾に関するものがあつた。条文そのものは忘れてしまつたが、その趣旨は以下のごとくであつた。

「人民大会堂の中では、絶対に痰唾を吐いてはいけない」「人民大会堂は、人民の創造による、世界に冠たる建造物、即ち人民の革命的芸術の粹である。これに向かつて『唾を吐く』なんてもつてのほか。中国の人民大衆に対する大いなる侮辱であり、反革命に値する」

こうした条文は裏から見ると、「無差別痰唾」はいけなないと知つていながら皆やつていた証拠である。

#### 「4」

外国人が中国へ旅行してビックリするのは、まずトイレであるが、その次は痰、唾である。日本のある婦人が書いた中国旅行記に載つていた話である。

夏のさかり、北京の街を歩いていると、いきなり二の腕に、何かベチャツと付着した。「あれっ！ 生牡蛎が落ちて来た、しか

も緑色の牡蛎だ！」と一瞬思つたが、それは見事な色鮮やかな青痰だつた。誰かが景気良く吐き飛ばしたのだ。途端に、全身ブルツと身震いしたという。

「中国では、外出から帰つた時、特に人混みの中を歩いた後は、かならず服装検査を念入りにせよ、特にズボンの裾についている痰、唾を清掃するのを忘れるな」という注意事項が、中国案内書によく書いてあつたものである。それほど中国の「随地吐痰」（痰唾を所構わず吐き散らすこと）はひどかつた。

そういえば、昔、ヨーロッパの都市では街を歩いて、両側の家の二、三階の窓から、ドットと振つてきた糞尿に出くわしたものだといふ。これは歴史文献に詳しく載つており、紳士、淑女が、頭から糞尿をぶっかけられている絵も沢山ある。フランスでは、「窓からの糞尿投棄禁止令」が発表されている。中国では痰唾だから、糞尿よりは、まだ文明的かもしれない。

私は、成長期の一部を日本で過ごしたから痰、唾を吐き散らす習慣はなかつたが、



がある。

[ 6 ]

では、医学的に見て、痰、唾とは一体何なのか。医者である兄に聞くと、以下のとおりである。

鼻腔からノドチンコを伝わり、口腔に垂れて出る鼻汁が、いわゆる青痰である（蓄膿、副鼻腔炎）。

気管支粘膜から上がってきて喉に溜まる滲出液が、朝、咽喉に少し溜まる痰である（カーツと気圧で吐き出せる）。

そして、口腔粘液が唾液等であることは言うまでもない。

三つのうち、一般的には鼻腔からの青痰を吐くわけだが、普通は余程量が多くても嘔み下してしまう。口中にあれば、飲みこむのに違和感がないが、一旦外に出したら再び口中に入るのには、「汚く」てできない。

気管から出る痰の方は、量が少なく、コンコンと咳をして口中に出し、そのまま飲み下す。これを外に吐き出さねばならないのは、肺化膿症という大病の人であり、とて

も普段の生活はできない。風邪を引いて、咳、痰が出ると言う人が、病院の診療室や待合室で、痰を吐かないのは、それを飲みこんでしまっているからである。

生理現象としての痰、唾を体外に吐き出さないではいけないくらい多量に分泌する人は病的であるが、中国人の身体が特別に病的だとも思えないし、また中国の気候条件が痰、唾を特別大量に分泌させるとも思えない。中国で痰、唾を吐くのは、鼻腔からの痰であり、どうしても吐き出さねばならない程の量ではない。たんに中国人の悪い癖であろう。

兄が、訪中した時に、中国の偉い人に、「何故、痰を吐くのか」と聞いたところ、「溜めておく」と衛生的に悪いから」と答えたそうだが、これは真つ赤な嘘。兄の診断によれば、風邪でノドチンコの裏に膿が溜まって、乾燥して出ない時は、強く鼻から吸い上げ、ノドチンコの壁から固い膿苔を剥ぎ取って、口に入れて吐く。これは、風邪の場合で、そうでない時は、気にはなるが、衛生上の必要性から吐き出すことではない。

中国の北方は乾燥していて埃っぽく、痰が出やすいと言う人もいるが、所がまわらず痰を吐き散らすのは、中国全体にわたる現象であり、地面に吐くのは、あくまでも悪い習慣と言え。鄧小平の伝記を読んでみると、一時も痰壺を身から離さず、よくベツと痰を吐く。絨毯の上には吐かないのは、それだけ中国の領袖も、進歩したわけか。

日本でも、昔は病院や駅に必ず痰壺があったものである。国鉄の客車の通路の真ん中にも、ポコポコ穴が空いていて、ここに痰を吐いていた。現在の日本では痰壺を見ることはめつたになくなったが、それだけ結核が消滅したということなのか。

外国の小説には、会話の途中で、人を軽蔑する話に及ぶと、よくベツと唾を吐く光景がある。即ち、侮辱を表す「唾棄」である。愛する恋人の唾を嘗めるとキツスとなるが、裏切られて憎む時は唾をかける。日本人は、外国程には唾を吐かないように思うが、最近ではストレス解消とか言って、思い切り空中に向かい「パカヤローツ」と怒

鳴り、「天に唾する」輩が増えたとか。東洋思想の影響の強い日本でも天を恐れない奴らが増えていると言つことなのか。

痰唾を余り吐かない我々は、一体、痰をどう処理しているのだろうか。ティッシュペーパーに取り、さらにビニールかポリエチレンで包み、一旦ポケットに入れて保管し、後でコッソリと捨てるのであろうか。しかし、町中や電車の中で、巷間そのような光景は滅多に見ることはない。唾は、常時食道から胃に入る消化作用の一部であつて、普段は皆、無意識に飲み込んでいる。体内から外に出ていないので、未だ「汚く」なつておらず、わざわざ遠くのトイレまで行って吐き捨てる必要もないのである。小便所で豪勢な音を立てて痰を吐く者がいるが、これは小便に來た序でまでのことである。

## 「7」

日本では、「痰を吐くな」という標語もなく、痰を吐いても特にとがめられることもなからう。しかし、人前で唾を吐き散らす

のはよくなく、嚙聲の的となる。

我々が子供の頃は、肺結核が流行つた時代であり、結核は空気伝染すると教わつた。結核菌は空気中にフワフワと浮いて漂つてゐるから、出掛ける時はマスクをし、家に帰つたらよくウガイをせよ。痰、唾を飲み下すと、結核菌が喉や腸にひっかかり、喉頭結核や腸結核になる。

私の亡父は、公衆衛生学者であり、下記の論文がある。

「街路上嗜痰中の結核菌の調査」一九三四年

これは、父が当時の上海で実施していた研究結果の一部であるが、専門の学術論文であるので、私は読んでいない。しかし、当時の上海の嗜痰の状況がうかがわれよう。

兄に聞いてみると、結核菌は血行性に散るのであつて、飲んだ菌とはほとんど関係がない。結核の伝染は簡単でないが、いまは患者がいなくなつたので、問題にされなくなつただけであるとの由。

中国の北方では、冬になると、大人も子供も外出時には、一斉にマスクをかける。

これは防寒のためだと言つ。室内ではマスクを首にぶら下げていて、戸外に出る時にこれをかける。しかし、マスクをすると、痰唾手鼻を飛ばすわけにはいかない。これは矛盾であり、どうしたらよいのか。実際には、その時は、マスクをちよつとつまみ上げるか、外すかすればよい。

最近の中国は、開放政策も進み、文明の度も深まつて來たためか、少なくとも大都會では「痰吐き現象」はぐつと減つて來ているように感じる。特に外国との合併でここ数年の間に二ヨキニヨキと建つた北京、上海や広州の近代的なビルディングの中では、もう全く見られなくなつたと言つてもよいくらいだ。

考えて見るとおかしなものだ。至る所に痰壺が配置されている駅などの公共施設は床一杯の痰唾と鼻汁なのに、全く痰壺の姿が見当たらない外国との合併のオフィスビル、ホテルやレストランでは、床がピカピカなのである。他人が吐き散らかした痰唾や鼻汁を見ると、条件反射的に、忽ちカーッと痰が飛び出し、ズルズルッと鼻汁が流れ出

すのであるうか。奇麗なヒカビカの床を見た途端に、出かかった痰や鼻汁も、たちまち引っ込んでしまつたのか。

「一般大衆は貧乏だから、ちり紙を貰うお金がない」なんて理屈はやはりおかしい。教育の普及と環境の改善によって、「無差別吐痰」は消滅させることができるはずであり、またそつすべきであるう。一國の宰相が他國訪問の上陸第一歩で緋の絨毯にカーッと青痰を飛ばすという光景は、もはや過去の語り草になつて行くであらう。

「醜い中国商人」を読んで

## 私営企業の活力に期待する

津上俊哉

(経済産業省北東アジア室長)

最近、日本でもようやく中国私営企業のこと知られつつある。年末十二月三〇日

付の日経新聞一面は「中国・私営企業の時代」と銘打つて中国最大の私営コングロマリット新希望集団の劉永好総裁に対するインタビューを掲載した。民主八党派に準ずる団体、中華全国工商連合会の副主席であり、全国人民政治協商会議の常務委員でもある中国私営企業家の出世頭だ。本書『醜い中国商人 私営企業経営者の実像』(武佐平著、算武雄訳、蒼蒼社刊)は、日本でもようやく脚光を浴びつつある中国私営企業の一面を活写した本だ。

\*

私事になるが、私は九六年から昨年春まで約四年間、北京の日本大使館經濟部に勤務した。現地で中国経済を勉強するうちに、日本では中国経済の重要な一面、私営企業の存在が見落とされていることを強く感じた。

中国私営企業の台頭、換言すれば伝統的な企業公有制の縮小は歴史の必然といえよう。経済(企業)の成長には十分な資本の供給が必要だが、既にGDPが日本円で一〇〇兆円を超えるに至つた中国経済の規模

に見合う資本の供給を一手に引き受ける力が今の中国の国家財政にはないからだ。むしろ過去二〇年間、過小資本で成長スピードを重視した報いで国有企業は大赤字を抱え、融資をした国有銀行も膨大な不良債権を抱えた。資本の出し手を多様化し総体としての資本供給を増やさなければ、もはや健全な経済成長は望めない。人口が増え続ける中、成長スピードを落とす訳にいかない中国にとつて、私営経済の発達を許容することは余儀ない選択なのである。

実は中国私営企業の発達は政府が公認する遙か前から進んでいた。今日私営企業の先進地域と呼ばれる浙江省、江蘇省や広東省では八〇年代半ばから、家族親類から金をかき集めて従業員数名で創業する私営企業が相次いだ。それ以来十数年、私営企業は差別と蔑視を受け、また何度も淘汰の波をくぐりながら雑草のように成長してきた。日本では中国経済と言つと、判で押したように「国有企業改革(の難しさ)」が語られる。そのこと自体に誤りはないが、「破壊」の傍らで進む「創造」も一緒に見なければバラ

ンス良く中国経済を捉えることはできない。共産党にとって私営企業はどこかバツの悪さを感じさせる存在だから、胸を張って宣伝されることは稀だが、現地でのプレゼンスは日本で想像する以上のものがある。マクロ的に成長を支えるという以上にミクロ的にも国有企業改革から吐き出される余剰労働力を吸収し、税収の担い手になってもらわなければならなかったからである。

今日、北京を始めとする大都市では中小国有企業というのが消えつつある。売却その他の方法でほとんどその所有が非公有企業に移されつつあるからだ。私が北京で勤務した九〇年代後半は共産党が必要に迫られて私営企業を認知していく過程に当たっていた。九七年の一五回共産党大会、九九年春の憲法改正（非公有制経済が「社会主義市場経済の重要な構成成分」と位置づけられた）と秋の共産党四中全会と、私営企業を認知する重要な政策的決定が相次いで行われ、メディアでも私営企業礼賛ブームが起こった。

前置きが長くなったが、以上が本書『醜い中国商人』が出版され、反響を呼ぶ背景

である。書名と目次を見て、最初は流行（はやり）の中国暴露本かな？という印象を持った。私営企業オーナー（老板）族の嘆かわしい生憎も豊富なエピソードを交えながら描写されている。しかし、暴露本ではない。同時に筆者が老板族の質的成長に強い期待をかけている様子が浮かんでくるからだ。

今日の私営老板の多くは社会の尊敬を集めるエリートではなく、社会には今なお彼らに対する懐疑と軽蔑の念が残っている。しかし、同時に彼らの少なくとも一部には、寝ても醒めても商売のことを考える真剣さとバイタリテイがある。これこそ国有企業に欠けていた貴重な素質だ。疑念の一方では、激しい競争と淘汰の波の中で勝ち残っていく私営企業こそが明日の中国経済を支えると期待する心情も存在する。本書は私営企業に対する中国社会のアンビバレントな見方を浮かび上がらせていると言えよう。

著者武俊平氏はそんな心情を抱きながら私営老板族がその人的素質を高める必要と社会が私営企業を正当に評価する必要を力説して止まない。

訳者の寛武雄氏は銀行勤務を通じて中国との関わりが長い方である。寛氏もまた、中国勤務経験者にはお馴染みのハチャメチャな中国の現状に溜息をつきつつも、一方で「私営企業の若い芽を大きく育てていくことこそ中国移行経済を成功に導く最大のテコ」、「勃興する私営資本企業が海外企業とパートナーシップを組んで大きく飛躍すること」を願うと訴えている。

私も全く同感である。中国私営企業は、未だ矛盾に満ちた不完全な存在だが、彼らに注目していくことは日本企業にとっても極めて重要と思う。これまでの日本企業の中国パートナーはほとんど国有企業だ。私営企業は外国人にとって極めてアクセスしにくい存在だったからだ。しかし、その国有セクターは遠からずGDPの四分の一を占めるだけの存在に過ぎなくなる。如何に中国市場に潜在性があると言っても四分の一としか付き合っていないのでは、成果も知れようと言ふものだ。

\* 全体として本書を読んで私は三つの感想



を持った。

第一、今後中国の私営企業が脚光を浴びる機会はますます増えると思うが、活力ある私営企業だからといって信用することも禁物だろう。私営老板が「堅気」の中国人から冷たい眼で見られることが多いのは何故か、本書はその理由を余すところなく語っている。

第二、他方で著者の描く（嘆かわしい）老板族は、年齢で言つとやや年輩の文革世代に、玉石で言つとやや石の方に偏っている憾みがある。若い私営企業家の中には高学歴でITやバイオ製薬などハイテク分野でベンチャー企業として上場を目指す新しい類型が出現している。また、冒頭に記した劉永好氏など、淘汰をくぐり抜けた「玉」の企業家は、その高い素質を見込まれて体制の中で出世するだけでなく、銀行業など、これまで国有企業に独占されてきた事業分野への進出を認められようとしている。本書の描くような老板だけが中国の私営企業家だと考えると、ややバイアスがかかってしまうような気がする。

第三、中国私営企業はその活力の故に、やがて日本企業の手強いライバルに育っていくだろう。模倣品など日本企業から「パクッ

2月15日刊

筑波大学専任講師

石井健一編著

# 東アジアの 日本大衆文化

日本発の流行は、アジア、特に台湾、韓国、香港で人気が高い。街を歩けば茶髪の若者や厚底靴を履いた女性をたくさん見かけ、ハローキティやポケットモンスターなどのキャラクター商品が売られている。テレビでも、日本のトレンドドラマやアニメが人気を博している。何故、日本の大衆文化の人気が高まったのか？ 本書は、この問いに答えるため、台湾、韓国、香港、中国(本土)における日本の大衆文化について実施したフィールド調査の結果を紹介しつつ、その現象を歴史・政治・経済・社会など多方面から分析し、さらに日本大衆文化の浸透の肯定・否定の両側面に論考を加えたものである。

A 5判 250頁 定価 本体 2600円 + 税 ISBN4-88360-021-1 C3330



## 《主要目次》

- 第1章 ニッポン大衆文化 その人気の広がり
- 第2章 国境を越える日本のテレビ番組  
台湾の事例
- 第3章 韓国における日本大衆文化とその開放措置
- 第4章 香港の若者の日本文化接触と消費行動
- 第5章 台湾における「日本」ブランド
- 第6章 親日と反日  
尖閣諸島問題をめぐる日・中・台報道
- 第7章 改革開放下の中国におけるメディアの変化
- 第8章 文化と情報の国際流通

## 『東アジアの日本大衆文化』 はしがき

石井健一

最近、海外で日本発の流行を多く見るようになった。

日本発の流行は、アジア、特に近隣の台湾、韓国、香港で人気が高いようだ。街を歩けば日本と同じ茶髪の若者や厚底靴を履いた女性をたくさん見かけるし、ハローキティやポケッタモンスターなど日本のキャラクター商品があちこちで売られている。テレビでは、日本のトレンドイデオロギアやニメが放送され人気を博している。

日本製の工業製品、特に電気機器は、以前からこれらの国で人気があった。しかし、日本のポピュラー文化が工業製品のように受け入れられることは、今まではなかったと言つてよい。一九八〇年代までこれらの国で外国のポピュラー文化といえば、ハリウッドに代表されるアメリカのポピュラー文化がほとんどだった。しかし、今や日本

のポピュラー文化は、東アジアの国ではアメリカのポピュラー文化に匹敵するほどの人気があるのである。

なぜ、最近になって日本のポピュラー文化の人氣が高まったのだろうか。本書ではこの問いに答えるため、台湾、韓国、香港、中国(本土)の各地域における日本のポピュラー文化について執筆者たちが現地でも実施したフィールド調査の結果を紹介しつつ、歴史、政治、経済、社会など多方面からの分析をおこなう。なお、本書でポピュラー文化という場合、特に若者のメディア利用行動や消費行動に焦点を当てている。

ただし、本書では、日本のポピュラー文化の人氣を紹介するだけでは、現象の一面しかとらえていないと考えている。これらの国において時に日本のポピュラー文化が政治的な問題となることは、あまり知られていない。東アジアでは、戦前の日本の植民地支配の経験から、日本のポピュラー文化の浸透を警戒する人は少なくない。最近まで日本文化を全面的に禁止していた韓国はいうまでもなく、比較的日本文化に寛容だとされる台湾でも、日本のポピュラー文化に批判的な人は多いのである。こうした負の

側面を無視して人氣のみを分析しても片手落ちであろう。そこで、本書はこれらの地域における日本ポピュラー文化の浸透について、その肯定・否定の両側面を実証データによって分析することを旨とした。

海外における日本のポピュラー文化は、これまでジャーナリスティックな興味本位の視点から語られることが多く、まとまった研究成果に乏しかった。本書の実証研究の成果は、国際コミュニケーションや国際関係論などへの新しい学術的な貢献ともなるであろうと自負している。また、文化交流という観点からも、これらの国における日本のポピュラー文化の実態を研究することは有意義であり、これらの国々との交流に関わっている方々に対しても参考になる成果を含んでいるのではないかと期待している。

【編著者紹介】筑波大学社会学系講師。一九五九年生まれ。東京大学社会学研究科社会学Bコース(新聞学)博士課程修了。博士(社会学)。著書に『変わるメディアと社会生活』(分担執筆、ミネルヴァ書房)、『消費行動の社会心理学』(分担執筆、福村出版)、『情報行動と社会心理』(分担執筆、北樹出版)など。

中国的なるものを考える

## 社会史と経済史の狭間で

福本勝清

(明治大学教授)

前著『中国革命を駆け抜けたアウトローたち』(中公新書)は、もともと『中国革命の社会史』というタイトルをつけるつもりであった。が、当時、中公新書編集部の手塚さん(最近おなくなりになった)に、それでは売れそうもないので、『中国革命を支えたアウトローたち』というタイトルにしたらどうかと言われる、「支える」では内容と大きくずれるので、せめて「駆け抜けた」にしてほしいということが決まっていたいきさつがある。社会史というタイトルをつけたかったのは、歴史のおもしろさ(読むことも、書くことも)を伝えてくれたのが、阿部謹也

『ハーメルンの笛吹き男』(単行本は一九七四年発行だが、論文はその前年『思想』五八一号に掲載)や網野善彦『無縁・公界・楽』(一九七八年)以後の、社会史の流れの数々の著作にほかならなかったからである。

だが、実は若干躊躇する部分もあった。どこに戸惑いがあったかといえ、社会史というタイトルをつけるのは、少しおこがましくはないかという気がしていたからである。何が、おこがましかったのである。日本において社会史がおかれた立場というものは、当初、けっして順調なもの、楽なものではなく、むしろ、かなり険しいものであった。

この辺の事情を説明するのは、今となってはかなり難しい。ただ、中村哲『近代世界史像の再構成 東アジアの視点から』(青木書店)第一章「近代世界史像の再検討」の注に、こんな記述がある。

「現在の社会史研究は、前近代、封建制資本主義の反動的な思考であるという評価もあるが、労働と所有の一致、自立的・主体的労働の回復という観点からの資本主義批判と

いう積極的な面ももっていると思う。もちろん、個々の実際の社会史研究は様々であるが」(九二頁)。

この第一章は、一九八三年八月一九日、歴史科学協議会の大会での報告をそのまま文章化したものであるが、ただ注と補注は、文章化したさい(同年十二月の『歴史評論』四〇四号に掲載)につけくわえたものだと後記に書いてある。

ここからわかることは、登場したばかりの社会史は、歴史研究の新しい波として熱烈な歓迎を受けていた反面、激しい反発や攻撃をも受けていたということである。戦後、歴史学の主流であった、社会経済史的方法に依る人々にとって、社会史は、それを否定するもの、さらには唯物史観を否定するもの、階級的な観点を欠くものとして、容認すべからざる存在であると見なされていた、そういうことであろう。先駆者たちは、当然、そのような猛烈な批判に晒されていた。だが、当時、読者にすぎなかった我々は、それらをあまり気にすることなく、読者としての快楽を味わっていたとい

うことになる。

社会史は、政治の歴史、経済の歴史に対して、単に社会の歴史だ、ということではなかったのである。社会史という研究領域が確立するまでは、さまざまな葛藤があり、その領域を切り開いた人々は、先駆者としての様々な試練を乗り越えて、今日に至ったのだと考えると、これまでただの本読みとして生きてきた自分が、タイトルとしてつけないからつけないかというのでは、少し虫がよいのではないかと思っただけである。

それから三年がたった。実のところ、どうして自分が躊躇する気持ちをもっていたのか、自分自身でもぼんやりとしか意識されなくなっている。社会史は、経済史でも政治史でもなく、さりとて文化史にも収まりきれない、社会の歴史で良いのではないかと思うようになっていた。ともかく、時代が変わったとしかいいようがない。

一九八九年もしくは一九九一年に始まった変化は、社会主義やマルクス主義といったものを、時代がかつた古臭いものとして、急速に記憶のあなたに置き去りにしつつあ

る。そのうち、一連の左翼用語、たとえばプチブルや小ブル、メンシエビキ、観念的といった語彙がどのような意味合いをもっていたのか、それがもっていた非難や侮蔑のニュアンスといったものについて、何か事典のようなものが必要になってくるだろう。

ところが、今、筆者が追いかけているのは、そのような時代の流れに、いささか逆行するようなことである。それは、前作を書きながら、民国の社会経済史的な枠組をもう少し勉強しておかなければ、社会史でも文化史でも、或いは政治史でも、その全体像を描き切れないと感じたことに始まる。

そこから、民国期の社会調査、農村実態調査などを読み始めたのだが、中国農村社会性質論戦や大上末広・中西切論争にかがずりあううちに、日本資本主義論争をめぐり、封建制から資本主義への移行をめぐるドップ・スウィージー論争や一九七〇年以降の従属理論や世界システム論を中心とした新移行論争へと、斜め読みを続けている。中国農村社会論、資本主義論争史、移行論争、新移行論争など、研究領域としてそれ

それ広大なものがあり、けっして斜め読みで事足りるわけではないのだが、どうしても後二年くらいで終わらせなければという、急ぐ気持ちがあり、とてもじっくり落ち着いてなんかやっつけられず、乱読を繰り返している。

発端は社会史だったのだが、結局、今読んでいるものは、すべて社会経済史もしくは経済史関係の著作ばかりである。ただ、だからといって、自分の頭の中身が経済史的な考え方に染まったわけでもない。というより、自分にはとても経済史的に考えるのは無理だと気がつくことが多い。

高橋幸八郎『近代化の比較的研究』「あとがき」に、歴史家高橋幸八郎とあるのを見て、とても奇妙な感覚に襲われたことがある。考えてみれば、世に大塚史学といひ、高橋史学という以上、大塚久雄も高橋幸八郎も、歴史家といつて何の不思議もないはずである。ところが、自分はずかしくも経済史研究者が歴史家だとはそれまで考えたことがなかった。『資本論』も、『ロシアにおける資本主義の発展』も歴史書ではないの

と同じ理由からである。これまで、経済史を歴史の一分野として意識してはこなかったということになる。逆に、自分にとって、「歴史とはコンテキストと過程の学問」であると述べたE・P・トムソン（民族学・人類学・社会史）の表現がもっともびびりたりくる。

それでも、また経済史の著作を読みつづけているのは、やはり、作品としておもしろいからというのが一番の理由だろう。若干つらいのは、一九八〇年代になると、国外の優れた著作のほとんどが、おそらくウォーラス・テインを除いて、翻訳刊行されなくなつたということである。ところが、一九七〇年代一九八〇年代前半が、国際的な論争としてもっとも充実した時期であった。結局、それらは英文もしくは英訳でしか読めず、この間の読書量に決定的に影響している。

当初、数年後には、日中両国の一九三〇年代の論争、日本資本主義論争や中国社会性質論戦、社会史論戦、農村社会性質論戦などの主役たちの理論的・実践的な活躍をちょうどデフレ・スバイラルや農業恐慌の時期にあたるので、それらを背景に、日中

両国における「社会科学の誕生」といったタイトルのものを一作書き上げようと考えていた。両国の社会科学の誕生は、デフレ・スバイラルや農業恐慌の時期に重なりあうように進化した。それゆえ、資本主義の発展に対し、両国の社会科学はともに、つねに否定的であり、さらにその否定面を過度に強調する傾向を本源的にもたざるをえなかつたと書くつもりであった。だが、それでも、その内容はあくまで、誕生の過程であり、理論家たちの活躍に重点を置くはずであった。

だが、いま、とてもそれを書くつもりになれないでいる。経済史の著作 日本では、どういふわけか、それらは歴史理論と銘打つたものが多いのだが、を読み続けるうちに、二〇世紀の社会主義とがマルクス主義といったもの、それを信奉した人々の運命の悲しさといったもの、についてより強く印象づけられることになった。

とはいえ、マルクス主義者や社会主義者がすべて、そのような悲しさという言葉で表わすことができるというわけではない。むしろ、大半は、とくにその指導者とが幹

部とか呼ばれていた人々のほとんどは、そのような同情に値しない人々であった。真理を独占し、さらに居丈高にその真理を振りかざし、支持者、同調者の上に君臨した彼らは、むしろ幸せな人々であった。筆者のなかにある、真理だとか、科学だとかいう言葉に対する嫌悪感は、そのような人々に対する反発から生れたものだと思っている。

話をもとに戻せば、マルクス主義がアジア、たとえば中国、日本にせよ、インドにせよ、その支持者を見出したのは、まぎれもなく二〇世紀の出来事であった。それぞれの社会の仕組をマルクス主義理論によってどのように描くか、それが理論家たちに課せられた大きな課題であった。講座派といい、労農派といい、あるいは、そのほかの理論的傾向やグループ、たとえば中国農村派や読書雑誌同人でもいいのだが、それぞれが提出したのは、各々がマルクス主義理論を使い描いた彼ら自身の自画像であったのではなかつたのか。というのも、その描き方自身が、彼らが何者であるかを描きだしていたからである。（続く）

逆耳順耳

矢吹 晋

北京日記二〇〇〇年八月(下)

八月二八日(月)

七時起床、和平賓館食堂で粥を食う。七時四〇分チエックアウトし、大連に向かうべく北京空港へ。村田忠禧教授と一緒にチエックイン。一時半大連空港着、二時大連賓館(旧ヤマト・ホテル)へ。昼は出迎えるの大連市党関係者とともにホテル食堂でさっそくエビの踊り食いヒラメの刺身、イカの煮物、その他料理二皿、餃子三〇個。大連海鮮料理に満足。午後三時前、人民路を大連港まで歩き、棧橋でコーヒーを飲む。ホテルへの帰路は魯迅通り。そこで、「甜の夢」なる日中混淆の看板を掲げた床屋で散髪二五元。なかなかセクシーな三十女の按摩はよく効いた。夕飯は村田氏と二人で、「天天漁港」へ。そこで馬糞ウニ二つ、えび踊り半斤、ヒラメ刺身一匹、仏跳壇、酒は「古井貢」酒三六五元也。真夏の夜、中山広場では野外夕

ンスパーティーがにぎやか。

八月二九日(火)

九時前大連市党校着。九時、九時半、矢吹報告、九時半、一〇時、村田報告。以後一時半まで九〇分自由討論。特に記すべきことはないが、日本企業の投資意欲減退について、政治的迷惑を語る中国人研究者の認識には今さらのように驚かされた。「企業は儲かる」ところには進出する。投資環境のよくない地域は敬遠する。これはビジネスの鉄則、市場経済の鉄則である。この種の経済原則を徹底的に理解すべきであり、なにもかも政治に結びつける悪しき政治主義から解放されないと中国の市場経済はうまくいかないはず」と強調。日中相互理解を阻む壁は、開放都市大連でさえまだ高い。

午後、念願の旅順港訪問。水師営の門票四〇元、ソ連軍烈士陵墓。二〇三高地門票は三〇元。ここに置かれた大砲は日露戦争当時のものではなく、いわばニセモノであった。タクシーは四五〇元だが高速料金二〇元也。

八月三〇日(水)

午後二時半、党校外事弁公室女性の見送りで、大連から北京に帰る。空港から急いで師範大学専家楼一四〇六室へ。居間、寢室、キ

チン、トイレつきの立派な部属。夜二時、村田氏のヘルプでようやく、メール接続に成功。パスワードを忘れたのが原因とは、末期的症状。

八月三一日(木)

九時三〇分ごろ、慕田峪長城遊覧の迎車が来るはず。九時半すぎ、村田氏夫妻とF夫人が見れ、LX教授のレンタカーで慕田峪へ。頂上まで上り二〇分、下り三〇分。午後一時半、定陵へ向かう。途中道に迷い、三時、「農家飯」を食い、桃をかじる。四三五元也。四時定陵着、駆け足で地下宮殿をみて、五時すぎ、宿舎着。

九月一日(金)

六時半、起床。午前、某誌原稿の続きを執筆して、メールで送る。一〇時、贈呈用「yaku pages」を収めたロム・ディスク作り。一枚は山西大学馮女史に、他の七枚は、中国在住の友人たちに贈呈。

一時すぎ、タクシーで北京飯店へ。娘から依頼された実印作成のため。惜しいことに東館は工事中で売店は閉鎖中。評判の漢方医によるマッサージもない模様。歩いてみると中館は見違えるほど豪華に改装されていた。王府井を歩き、マクドナルド対面の

店で実印を依頼。一文字一五元で五字依頼し、印材三〇〇元と合わせて三〇五元也。その後地下鉄建國門で乗り換え、積水潭まで。タクシー一〇元で師範大学東門へ。地下鉄出口で水滴のつく、冷たいワハ八印ベットポトル三元。売り子はアザラシ青年で手元不如意、「どれでも好きなやつを自分でとってくれ」と言われる。身障者が堂々と生きていることに感激。

三時帰宅、太原行き旅行の荷物準備。午後四時半、新世紀飯店から三浦徹明教授が着くはず。それを待って北京空港で村田教授一行と待合せ。そこへNHK加藤高広記者夫妻が追いつき、合流。こうして村田夫妻とその友人、三浦・矢吹に加藤夫妻を加えた七名からなる旅行団で、二泊三日太原の旅へ。夜九時すぎ太原着、馮教授夫妻の出迎え。華明大飯店八〇三室に落ち着く。

九月二日(土)

七時半、朝飯、八時一〇分、バスで一六〇キロ離れた「王家大院」へ。大学卒ガイド嬢の歯切れの良い説明を聞きながら、ゆつくり清朝「五品官僚」、「四品官僚」の豪邸を見る。一時すぎ參觀終了、昼メシは八六元で盛り沢山、青島黒ビールつき。村田夫人がカメ

ラをなくして一騒動。四時世界遺跡平遥城壁に登る。五時半晋祠参詣。七時晋陽飯店で夕食。九時すぎまで大宴会。

九月三日(日)

六時半チエックアウト、二泊で三四八元の安さ。北京空港からはリムジン一六元で三浦教授とともに宿舎に戻る。三時半、バス二二号で西単へ。地下鉄で王府井、そこで依頼していた娘の「実印」を受け取る。友好商場にふらりと入り、純綿の半袖シャツを買って、着替える。一九八元也。再び地下鉄に乗り、西単へ。時代広場三階でブラックコーヒーを飲みながら、「性学」なる地下鉄売店で買った社会学者の本を拾い読み。六時、旧四川飯店・現香港俱樂部で北京駐在のジャーナリスト諸氏(加藤高広記者を含む。これが最期の別れになろうとは!)を招宴。話題の焦点は、日中関係、のち森保裕記者が本日休業の日本風バー「赤とんぼ」を無理やり開かせ、乗り込む。加藤記者の顔もそこにあり。

九月四日(月)

一二時半、国際倶楽部ロビーで昨夜の支払い。地下鉄で軍事博物館へ。経済犯罪展を見る。ばかばかしい限り。地下鉄とタクシー

で西直門から帰る。四時村田氏のヘルプで郵便小包五キロの箱を五つ出す。箱代五〇元、郵便代一七〇元。帰宅後二〇元、「報關税」支払いの電話催促あり、再度郵便局に向いて支払う。担当の李君申しわけなさそうな表情。三環路と新街口交差点のレストランでスッポンスープと豆もやし。牛肉そば一六一元也。荷物を整理して九月五日(火)帰国。

### NHK加藤高広記者を悼む

NHK加藤高広記者はモンゴルの雪害取材に出かけたが、二〇〇一年一月一日、ヘリコプター事故で焼死した。加藤君はその年齢が私の息子に近いこともあって、この数年、北京に派遣されるまで特に親しみを感じて勉強会を続けていた。なんとも痛ましい。痛恨の極みとはこんな気分か。彼は年末に旅行の写真とともに手紙をくれたが、私は旅行中で返事も書かないうちに逝った。加藤君の旅行写真に添えられた短い手紙にはこう書かれていた。

「ご無沙汰しております。山西旅行の折

は楽しいひと時を過ごさせていただき、ありがとございます。遅くなって恐縮ですが、旅行中の写真をお送りいたします。寒さの厳しい季節となりました。呉々もご自愛下さい。二〇〇一年二月一四日「こまではワープロで以下の追記があった。」「矢吹先生、お元気でいらっしやいますか？先生の御著作を教科書にして、毎日取材に励んでおります。加藤高広（署名）。」

『蒼蒼』前号の「北京日記」八月十七日の件に以下のように書いた。「(夕刻)五時半、中国大飯店へ行き(雲助タクシー四五元)、KT氏と五糧液を痛飲。このインシャルKTとは加藤高広記者である。このとき、村田・矢吹は加藤記者のおごりで天下の銘酒五糧液を三人で一本空けながら、天下国家と日中関係を論じ、同時に村田教授の提案した太原旅行計画に加藤夫妻も私的に(記者としてでなく夏休みで)同行することが決まった。太原では、ロシア語通の加藤記者夫人に、「クラシーバヤ・ジェーブシカ、ドブルイ・ウートラム」などと語りかけながら楽しく旅行したのであった。訃報を知らせる同僚からのメールはこう

「既に新聞などで報道されていますが、加藤記者が搭乗したヘリコプターは着陸に失敗、炎上した模様で、彼は焼死したようです。病院に搬送されてからではなく、事故現場で死亡した模様です。現場がウランパートルから随分離れているので、通信上のミスか何かで彼は助かっているかも、という一縷の望みを抱いておりますが、無念です。ご遺族は昨日、ウランパートル入りされました。葬儀などにつきましては、現段階では未定です。」「加藤高広記者のご遺骨は、(一月)二十四日午後七時前、恵子夫人らご家族と共に成田に到着し、海老沢会長、各理事、モンゴル大使館のダシブレブ公使らが出迎えました。空港の応接室に臨時の祭壇が設けられ、献花が行われました。恵子夫人は、夫が中国での記者としての任期をまっとうできず、このような形で帰国することはたいへんに残念です」と、加藤記者がウランパートルのホテルに置いていったコートを胸に抱えて、涙ながらにあいさつしました。」

加藤記者の訃報は台湾の友人戴国 氏の訃報の直後に知らされた。センター試験の監督や期末試験の雑事に忙殺されるのは、むしろ救いのようにさえ感じつつ。

## アジア経済研究所 丸川知雄編 中国産業ハンドブック

二〇〇一年版

A5判三五頁定価三〇〇〇+税  
中国産業動向をガイドする。二〇業種の基本動態、主要企業、重要年表、情報源、重要指標。執筆者はアジア経済研究所研究プロジェクト参加の第一線専門家。WTO加盟によって大変動を遂げる中国経済をウオッチするための必携書。

## 三菱総合研究所編 中国進出企業一覽

二〇〇一年版

B5判一三〇〇頁 定価一万五千円+税  
中国に展開する日系企業のビジネス拠点データブック。第十四版目で、旧版を大改訂。アンケート調査によってデータを精選し、会社別の各種在中ビジネス拠点を一覽する。中国ビジネスオフィス必携書。